

海音寺潮五郎

真田幸村

下



六興出版

真田幸村 下

海音寺潮五郎

真田幸村 (下)

昭和五十八年十月二十日 第一刷  
昭和六十一年十一月二十日 第五刷

著者 海音寺潮五郎

發行者 賀來壽一

發行所 株式會社 六興出版

東京都文京区水道二ノ九ノ二  
電話東京(983)三四三二(代表)  
振替東京一ノ九二四四八番

印刷 三秀會  
表紙 半七寫真  
製本 明泉堂

真田幸村(下)目次

|          |    |
|----------|----|
| 龜田清海     | 11 |
| 葉末の淡雪    | 18 |
| 短冊と鎧通刀   | 25 |
| 微行       | 33 |
| 梅雪の子     | 40 |
| 草いきれの中に  | 47 |
| 十八族は欲が深い | 55 |
| 鸚鵡がえし    | 62 |
| 巴の形勢     | 69 |

|         |     |
|---------|-----|
| 起誓文二通   | 147 |
| 小猿赤吉    | 140 |
| 故実談義    | 133 |
| 落葉の下水   | 126 |
| いびき     | 119 |
| 斜陽千曲川   | 112 |
| 尼ガ淵の水   | 105 |
| 水晶の念珠   | 98  |
| 羅漢寺山の溪谷 | 91  |
| 甲州女狩    | 83  |
| その人不在   | 76  |

鳳 雛

海老で鯛

宣戦の布告

流言の策

大鼠山伏

反間の策

椎の木蔭で

兵は詭道

はじめての采配

岐れ路

解説・真鍋元之

227 219 212 205 198 190 183 176 169 162 155

## 亀田清海きでんせいかい

### 一

その日の夕方、赤吉は甲府から東方四里半の東山梨郡松里村の恵林寺えいりんの前に立っていた。恵林寺は鎌倉時代末期、幕府の重臣であった二階堂出羽入道道藏どうぞうの寄進で、夢窓国師が開山した寺であるが、武田信玄が帰依して家の菩提寺ぼだいじとし、寺領三百貫文（石高では千五百石にあたるという）を寄進し、美濃から土岐氏の一族である臨済の名僧快川国師かいせんを招いて住職としてから、禅風大いにおこり、二百余の雲水が集まり、天下の名刹しやくとなった。

そのさかんな頃には、境内三万六千四百坪、山林一里四方にわたり、七堂伽藍がらん、鐘楼、鼓楼、五重の宝塔、楼門、左右七十二門をそなえた廻廊等、宏麗こうれいをきわめた。

この大寺院が焼けたのが、この四月三日だ。この寺に武田家の敗卒らが逃げこんだ。敗卒だけでなく、前に江州半国の主として観音寺城にいて、信長の上洛軍じやうらくぐんに抵抗し、その後も反抗を継続した六角承禎入道はこの頃佐々木次郎と名のつて甲州に来ていたが、この人物、信長に京都を追われて毛利氏に身を寄せている前將軍足利義昭の使者としてアンチ信長の包囲ライン結成の打合わせのために武田家に来ていた上福院という坊さん、大和淡路守という人物、以上三人も寺に逃げこんでいた。

武田征伐の総司令官織田信忠は、これらのことを知り、寺にたいして、

「引渡せ」

と命令したが、快川和尚は、

「俗世においてどんな罪を犯した者でも、仏の目から見れば同じでござる。まして、これらの者は右府公のおん敵であったというまでのこと。敵味方となるは武士の間では世上普通のこと。すでに当山に入り仏の袖にすがっている以上、お見のがしいただきたい」

と返答した。

信忠はきかない。使者は三度まで来た。ついには、「あくまでも強情を言いはられるにおいては、一山の滅亡となりますが、それを覚悟でござるか」と言つた。

「拙僧は仏のみ旨を受けて申しておる。お聞入れなく一山をお取潰しなさるといふなら、ご随意になさるがよからう。古より寺塔滅却の惡王暴君は、ためしなきことではござらぬが、その人々の末始終がどうであつたか、これまた歴史に昭々たるところでござる。はつきりと申す。仏のみ袖にすがっている者、断じてお引渡しはいたさぬ」

快川の答えは断乎たるものであつた。

信忠は怒つて、川尻肥後守秀隆に命じて、寺を焼打させた。

快川はその以前にかくまっていた武士らをひそかに落ち行かせておいた。川尻は寺を包囲しておいて、火をかけ、逃げ出そうとして走り出す者は一人も逃さじと殺した。人々は追われ追われて、山門の樓上に集まつた。川尻は山門の周圍にひしひしと人馬を寄せ、高く薪を積み上げて火をかけた。

快川は人々をその位によつて座列をきめ、威儀を正して、すわらせ、自ら師家の座の腰掛にすわり、仏子（はつす）を振つて、

「諸人、今、火焰裏に坐す。ソモサンにして法輪を転ずるや。各々言いて、末語の句となせ」と言つた。

坊さんらは、それぞれ所見を言つた。こんな時の句は古来からの名僧らの句が山ほどある。その中から自分の心境に合ったのを選んで言えばよいのだ。即座に自作すれば一番よいのだが、自作でなく、借りて用いてもよい習わしだ。「紅が上一点の雪」などという句は最も使われる句だ。

快川は一々うなずきながら聞いていたが、皆がおわると、サツサツと仏子をふつて、

「安禪は必ずしも山水を須いず、

心頭を滅却すれば、火も亦涼し」と朗吟した。

その間に火は放たれて炎々と燃え上り、樓上の人々は苦悶し、叫喚し、おどき上り、たがいに抱き合つてもがき、苦しみにたえず飛びおりて逃れようとする者

もあつたが、皆武士共に殺されてしまった。ひとり、快川は臥坐したまま寂として動かずして、焼け死んだ。

## 二

赤吉はこの寺が宏大壯麗をきわめていたことは知っている。武田家の菩提寺として甲州第一の寺格を誇っていたことも知っている。放浪の集団乞食の一人であつた赤吉など、普通では山門をくぐることも出来なかつた。もっとも、入ってならんとなつているところには必ず入つて見ることにしているから、このへんに来るたびにちよろりと入つたから、山内くまなく見物はしている。

しかし、寺がいつ創建されたか、どういうわけで焼かれ、どんな風にして多数の坊さん達が死んだか、などのことは知らない。ただ、織田勢のきげんを損じたため寺が焼きはらわれ、多数の坊さんが山門に迫り上げられ焼き殺されたとだけ承知している。

かつての壯麗を知っている赤吉には、夏草の茫々と生い繁つている中に焼けのこりの木材や石畳や、石の階段や、庭組みだけがのこっている情景がほんととは

思われないほどであつた。

「新府のお城はおら中に入つたことはなかったけど、ここはよう知つとるところじゃけなア」

夕陽の流れている中に、風がわたり、まわりの林の中から澄んだ蛸の声が聞こえてくる。

赤吉はぼうぜんとして、しばしあたりを見まわしているだけであつた。

赤吉がここへ来たのは、

(信証院ちゅう尼ご前は、先代のお屋形の姫君じやつたというのじゃすけ、菩提寺の恵林寺に行けばきつとわかる。恵林寺は焼かれたちゅうことじゃが、織田のオッサンがこげいになつた以上、逃げた坊さんの一人や二人帰つて来とらんことはねえはずじゃ。燕じゃてもと巢をくうたところにもどつて来るのじゃ。坊さんなら一層昔が恋しかろ。そしたら、その尼ご前のこともわからんはずはなかる)

と、思案したからであつた。

しかし、赤吉のこの見当は違つたらしい。きつと坊さん達の宿舎のあつたところに小さな小屋でも結んで、一三人の坊さんが住んでいる情景を思いえがいて来た

のだが、そんなものは影も形もない。

(こらいかんわ。こっちゃは急ぐのや。これがはずれたら、思案しなおさんならんが、間に合いそうにねえわ。せつかく夜昼駆け通しで来たのじゃが、出直しじやな。やれ、やれ)

廻廊の門のあったところの階段にすわり、立てた膝にひじをつき、頬<sup>ほ</sup>づえし、子細らしく焼けたあとを見まわしていると、鋭敏な嗅<sup>か</sup>覚<sup>かく</sup>に煙<sup>けむり</sup>のにおいがして来た。中に飯と野菜と味噌のにえるにおいがまじっている。雑炊<sup>雑炊</sup>を焚<sup>た</sup>いとるのじやと判断した。

(オンヤ、誰ぞいることはいるわ。あきらめるには早いぞ)

赤吉は空に鼻を向けてクンクンと嗅<sup>か</sup>いだ。野の獣が警戒すべき臭気を空気のなかに感じた時、こんな形をする。その姿のまま、ソーッと立ち上った。鼻の先きでわずかにつかんだ臭気の糸を切らさないようにしてたぐって行くに似ていた。時々、フンフンと確かめながらしずかに歩いて行った。

こうして赤吉はにおいに引かれて、寺の裏の林の中まで入って行くと、夕日が赤い縞<sup>しま</sup>目<sup>め</sup>になってさしこん

でいるそこに小さい小さい草葺<sup>くさむき</sup>きの小屋があつて、小屋の外に坊さんが一人いた。石をならべてこしらえた小さなかまどがあつて、薄い煙が立ちのぼり、鍋がかつている。坊さんはそこから、二間ほど離れた位置にある大きな木の根方に腰をおろし、足をふんばり、大きなどんぶりをかかえこんで、しきりに箸<sup>はし</sup>を動かしてかきこんでいる。

近づくにつれて、くわしくわかった。坊さんはいが栗<sup>栗</sup>のようにのびた頭をし、黒い衣の袖をたくし上げて、鼠色<sup>ねずみいろ</sup>にかわった白衣の両袖を肩から見せている。大きな坊さんだ。年頃二十前後、顔の下半面、短い真黒なひげがびっしりと生えている。腕も大きく、足もたくましく、それにも真黒な毛がもじやもじやと渦を巻いて生えている。

ついそばまで行つて、赤吉は足をとどめたが、声はかけない。わき目もふらず、食欲だけになり切ったように見える坊さんの姿が見事でさえある。見てみると、こちらもおぼえず食べたくなるようであった。

(うまそうに食うとるわ。この雑炊よっぽどうまいのじやろか)

涎のわいてくる気持で、まじまじと見つめていると、

坊さんは食べおわり、赤吉の方を向いて、

「ボン、食うか」

といった。

「おくれな。ちょうど時分どきや。おれむすび持つとるけど、オマンの雑炊うまそうやけ」

「よっしゃ」

坊さんは自分の食べていたどんぶりほどに大きな木ぐりの椀に、小屋の入口にある水桶から水を入れ、箸でよくかきまわしてすぎ、ゴクゴクと飲んで、その椀を袖でごしごしと拭いた。鍋の雑炊を木ジャクンですくい、こてこてと盛り上げてくれた。箸も袖で拭いてくれる。

赤吉はきたないなどとは思わない。ありがたういただいて、両手でささげて黙禱して、それから椀の中を見て言った。

「坊さんのくせにえらいおごつとるなア。いろいろ入つとるで」

「ああ、今日は少しおごつとる。里でもろうた野菜が二種、この林の中をとった山菜が三種入つとる。いつ

もはそんなにおごらん。三種以上入れると、ついくせになるので、三種をかぎりとしとるのじゃが、今日は少しおごつてみたいと思うたのじゃ。そのかわり、味噌を喰めた」

と、坊さんはまじめに言訳する。

「いただくで」

赤吉は大きな椀から口を離さず、顔を入れづめにし、忽ちにして食べてしまった。うまかった。

水をもらつて、きれいにすぎ、それも一滴もあまさず飲んだ。手拭で拭いて、かえた。

坊さんは、鍋と椀を小屋の中にしまつて、前の位置にすわり、

「ボン、そなた、武家の姿をしとるが、武家ではないようじゃな」

と言った。

腹がくちくちくなつて、赤吉はのんびりした気持だ。

「ようわかるな。しかし、武家は武家じゃ。真田安房守の次男源次郎幸村の家来じゃ。これでも士分なんじゃでエ。うそじゃねえ。もつとも、士分になつてからまだ十日立たんがの」

「ふうん？」

坊さんは首をひねった。べつだん疑っている顔ではないが、不思議がっている表情だ。

「おら、前は山窩やぐらじゃったけ、それがなかなかぬけんのよ。源次郎どんに見出されて、郎党になったちゅうわけじゃ」

「ああ、そうか」

はじめて合点の行った顔になる。

その時、林の外ではすっかり日が入ってしまったらしく、木々の間からさしこんでいた夕日影が一時に消えた。赤吉はわれにかえった。

### 三

「坊さん、おらたずね人があって来たのやがな。オマシ知つとらんかの」

と、赤吉は言い出した。

「このへんの者をたずねるのじゃったら、わしなんぞにたずねるより、このへんの里の者の方がようわかるぞ。わしはこの寺以外のことのほかは何にも知らん」

「おらがたずねたいのは、この寺にかかわりのある人

のことじゃ。この国の前の——うんにや、今では前の前のお屋形ちゅうことになるが、そのお屋形の姫君で尼ぞご前まへになって信証尼という名になっていなさる人がいなさるじゃろ。その人をたずねて来たのじゃが、どこにいなさるかの。おまん知つとるなら、教えてくださる」

次第に暗くなる中に、坊さんはひとみを沈めて鋭く赤吉を凝視しつづけ、急には口をきかなかった。それで、赤吉は相手が知っていることをさとした。

「そげいな目で見んでもいい。その尼にご前まへのため

に悪いことを、たくらんどのではねえ。おまんも知ってござるじゃろ、おらが主人のおやじ様の安房守は忠義な人じゃちゆうて、あのさわぎの後、武田家のご家来衆で、上州の岩櫃いわがぶまで来て奉公を願わしかった人がうんとこさあるくれえだ。そのむすこである源次郎に悪い心のあろうはずがねえ。源次郎どんはその尼にご前まへどんが、武田家の血を伝えるたった一人のお人じゃけ、忠義をつくしたいのじゃ。——あッ！ 話があと先きになったわ。おら、旦那だんなのその心を知つとるさけ、旦那に忠義をさせべいと思うて、方々さがしているの

じゃ。さがしあてれば、おらも旦那に忠義ちゆうことになるさけな。どや、経緯はわかったじゃろ」

と、熱心に説いた。

坊さんは大きく頷いた。もうすっかり暗くなっている、坊さんの傾く姿が影絵のようであった。

「わかった、わかった。わしはよく知らんのじゃが、そこへ行けば大ていわかるじゃろうというところを知っとる。そこへ行くがよい」

「へえ？ それどこかいな」

「塩山の向嶽寺じゃ。向嶽寺に行つて聞いてみるがよい。ここからそう遠いところでない」

坊さんは道を教えようとした。

「わかつたる、わかつたる。塩山のお寺なら、おらもう知つとるわ。えらい世話になったわ。雑炊までふるもうてもろて。どやな、むすび置いとこか。おらも一かたげ助かつたのやけ」

と、首の包みを解きかけた。

坊さんは笑つた。

「いらん、いらん。旅をする身には食いものが一番大事じゃ。持つて行くがよい」

「さよか。そんなら、そうするわ。えらいお世話になったわ。——あッ、おらが名は赤吉、真田源次郎幸村が郎党赤吉ちゆうのじゃ。おまんの名は？」

「亀田清海。快川国師の鉗鎚を受けていたのじゃが、去年から雲水の旅に出ていて、旅先で本山の大難を聞いて帰つて来て、こうして庵を結んで、国師のことを偲んでいるのだ」

と、坊さんは言つた。

「さよか。おまんも忠義をつくしとるんじやな。そんなら、亀田清海どんや」

「待て、待て。向嶽寺に行つたら、あそこで喝食をしとる亀田伊三丸というのがある。わしが俗弟じゃから、先ずそれに会つて、いろいろと頼むがよい。そんなら赤吉ボンや。行かつしやい」

もう真暗だ。しかし、赤吉は夜目がきく。すたすたとかわりない足どりで林を出た。

## 葉末の淡雪 はすえ あわゆき

### 一

塩山の向嶽寺は恵林寺の東南方約二キロ、南北朝の北朝年号の至徳元年に武田氏の先祖信成が大檀那として建立したもので、開山は拔隊得勝禪師、臨濟禪のなかでも拔隊流といわれる一派の本山になっている名刹であった。これも信玄の帰依浅からず、武田家さかりの頃はずいぶん盛大なものであったのである。

赤吉は恵林寺を立去ると、二十分ほどの後には、山を登り、山門の下に立っていた。陰森とした樹木に蔽われた広い境内のあちこちに建物があつて、ちらちらと灯影が見える。それを見渡しながら、

（あの人のよいひげ坊さん、亀田清海どんは、この寺に弟が喝食しとるというていたな。伊三丸という名前じゃというていたぞ。喝食というからには、まだ子供

じやろから、話がしよかる。しかし、どこへ行ったらいるのじやろうか。やたら灯がついとるなあ……？）

と思索していたが、ちよつと考えつかなければすぐ行動に出るのが身についたものになっている。最もにぎやかな灯明りのある建物に向つて歩き出した。

玄関があつて、上りがまちに近く鉄骨の行灯がでんとすえられ、銅羅がぶら下り、そばにタンポをつけたバチがおいてある。

（禪寺ちゆうやつは、無駄のない仕掛がしてあるわい）

感心しながら、バチをつかんで、力一ばいひつぱたいた。びっくりするほど大きな音が出て、あたりの清寂を破った。

そのこだまがまだ返つて来ないと思われる頃に、奥の方から足音が近づいて来た。はだして板をふんで、いさぎよいさばきの足音だ。法衣を裾短かにはき、丸くけの帯を前結びにした坊さんが出て来て、行灯のそばにすわった。青々とした頭をした、まだ若い坊さんだ。雲水が来たのだからと心意して出て来たらしいが、おかしげな子供が立っているの、意外げな顔に

なった。

「ご用か」

「そうです。おらは伊三丸ちゅう喝食どんに用事があつて来たのです。伊三丸どんの娵<sup>しやば</sup>婆の時の兄<sup>あに</sup>さんじゃという恵林寺の亀田清海どんに言われて、たずねて来たものです。おらが名は赤吉。真田安房守の次男源次郎幸村の家来です。これでも士分<sup>さむらいぶん</sup>ですわい」

「わかった。すぐとりついで進ぜる」

と坊さんは言っておいて、

「しかし、お前様、なんでそう無駄使いばかりしなさる。当山の喝食伊三丸殿に会いたい、身共は真田の次男源次郎幸村の家来赤吉、伊三丸殿の俗兄清海殿の紹介を持ってまいった、といえど足りるものを、無駄ごとが多すぎますぞ。先刻もその銅羅をたたくに、ああ強<sup>あ</sup>くたたくことはない。あの三分の一の力で十分でござる。ぜいたく千万でござるぞ」

と、説教した。

赤吉はすくみ上りながらも、

「へえ、それでも……」

と言いかけると、坊さんはもう立上っていた。

「とりついで進ぜる。しばらくそれへひかえさっしやい」

言いすてて、さっさと奥へ入って行く。

待つ間もなく、一人の少年が出て来た。おそろしくふとって、ころころしている。赤い頬<sup>ほ</sup>つべたのへんがはちきれそうだ。

「オマン、おらをたずねて見えたのじゃと」

と、キンキンした声で言った。年ごろは十二三に見えた。寺小姓らしく、長い袖の着物を着、はかまをはいているが、子供のくせに下腹がでぶでぶとつき出している。

「おらちゅうからには、オマン伊三丸どんかえ」

と、赤吉は問いかえた。

「ああ、伊三丸じゃ。オマンが真田のご次男源次郎なにがし殿の家来赤吉どんかえ？」

「赤吉は違えねえが、源次郎なにがし殿ちゅう言い方はなかんべ。源次郎幸村殿じゃわい」

「ああそうじゃった。ちょこら忘れてしもうたわ。おれ、あんまり物覚えのよい方でねえけにのう。ゆる

さっしやれ。——ところで、オマン、おらが兄者の清海から引合わされて来たちゅうが、清海は元氣もつちにしとったかいな」

「おお、ずいぶんまめにしとんさったわ。雑炊食うとらしたで。もつとも、おらもふるもうてもろうたがな」

「ほう？　どんな雑炊やった。何が入った？　うまかったかい？」

ふとった頬つべたにおし上げられて、糸を引いたように細い目がにわかにわかに生き生きとかがやいて、熱心に問いかけて来る。よだれの垂れそうな口もとになっている。

赤吉は説明しなければならぬ。里で供養を受けた野菜が二種類、恵林寺の林の中で自ら採取した山菜が三種類入って、大へん味がよかったしじか。

「ほうかい、ほうかい。——まあ、立話りだではいかんけに、掛けるがよいわな。ここへ掛けて、とつくりと教えなさる」

上りがまちに腰かけさせて、なおどんな野菜や山菜であつたかを、根ほり葉ほり聞く。

赤吉は一々答えていたが、ふとばかしくなった。第一、こちらは急がねばならぬ。

「雑炊の話はそれでやめとこ。いくら話しても、話は話で、そのものではなけすけな。ところで、おらがここへオマンを訪ねて来たのは、大事な用があるのや」と、信証院尼公の現在の居場所を聞いた。

伊三丸の鞠まりのようにまるい顔はにわかにわかに緊張の色を見せた。

「オマン、それ聞いて、どげにするつもりじゃ。何の用事があるのじゃ」

と、一層キンキンした声で言った。

赤吉は真田昌幸の武田家にたいする忠誠を説き、幸村の忠誠を説き、信証院尼公のことを大へん心配しているという一ぶしじゅうを復習しなければならなかった。

「ふうん。おら知ってはいるが、一べん和尚さんに聞いてみんことには、言うこと出来んな」

「聞いてみておくれな。おれ、和尚さんに会うてもいいで」

「そんなら、待っとり。聞いてみるさけ」

伊三丸ははち切れそうなりしる姿を見せて奥に入つた。

## 二

三十分ほど後、赤吉と伊三丸は向嶽寺の山門を出、山を下りつつあった。

向嶽寺の住職は、自ら玄関に出て来て、赤吉に会い、その言うところを聞いて、怪しいことはないと判断したのであろう。伊三丸に、案内して進ぜるようと言つたのである。

連れ立って、石段道を下って行く二人の様子はいい対照であつた。赤吉がいかにも軽やかにトントントンとはずむように調子よく歩いて下るのにたいして、伊三丸は一段一段ズリズリと大きな牡丹餅でもおちて行くようであつた。スウスウ、呼吸をはずませて、いかにも苦しそうだ。ついに、

「オマン、もうちょっぼり、ゆっくり歩いてくれんかのう。そげいに急がしゅう歩いては、おれ呼吸が切れてかなわんわ」と言つた。

「ほうかいな。おれいつもの三分の一くれえの速さで歩いとるつもりじゃけどなあ。ほなら、五分の一の速さにしようわい」

と赤吉は歩度をゆるめた。

石段道をおり切つて、平坦な道に出ると、伊三丸は元気を回復した。

「おらは歩くのは不得手じゃが、力は強いのでエ。角力取らせたら、寺の雲水百人以上のうち、おらにかのうものおらせん。みんな一ひねじりじゃ」と、気焰をあげる。

「オマン、やがて坊さんになるのじゃろ。坊さんが角力強うてもしよはないじゃろが」

と、赤吉がいうと、

「うんにヤア、おら坊さんにはならん。食いものが少なすぎるけ、生きとる気がせんのじゃ。おらどうでも武士になりてえ。もともとおらが家は武士じゃったのじゃけ。おらが三代前の祖父様は出羽由利郡亀田の城主赤尾津殿の家老で、三好出雲守高元入道一雲という人であつた。そのもとは遠く四国の阿波の三好一党じゃわな。その三好一党は元来は信州の小笠原氏じゃけ、